

# 失われたのは誰にとってか？

シュテフィ・リヒター

## I

このシンポジウムのキーワードは「失われた20年」ということだが、ここではこのコンセプトに対する私自身の考え、ないし居心地の悪さについて述べてみたい。といっても、なぜ、かつての「失われた10年」がいつの間にか「失われた20年」になってしまったのかというようなことを問題にしようというのではない（ちなみに、デジタルのテキストでは名のある論者たちによって「失われた15年」とか「失われた30年」と言われたりもしている）。私に居心地の悪さを呼び起こすのは、むしろ一般に、ある歴史的な時代を「失われた」と明確な規範のようにして表現してしまうことである。これには三つの観点がある。

まず最初に正直に告白しておけば、（同じように規範的に論じることになるが）東ドイツに生まれ育ち、今もドイツの東側で生活をしている私自身にとって、この25年は再出発と発見の時代であった。実際その間に世界ははるかに大きく広がった。ドイツ民主共和国が消えてしまったということは確かに消失ではあったが、たいていは獲得でもあった。これから間接的に伝えるように、これは日本研究者としての私にとっても妥当する。ちなみに、私はこの経験を他の研究者や知識人と共有している。たとえば柄谷行人は1997年の「Japan is interesting because Japan is not interesting」という講演で次のように断言する。

I felt almost suffocated in Japan during the 1980s, when people seemed to be euphoric and Japanese capitalism seemed triumphant. Fortunately, the system is now (in the early 90's, with the burst of the 'bubble-economy') collapsing. At the same time there is a growing repulsion towards global capitalism, which undermines the self-sustained and self-complacent space of Japan. (Karatani 1997)

この引用で、「失われた何年」という考えに対する二つ目のファセットが示唆されたことになる。失われた何年というフレーズは、いつかは克服されるべき「日本」対「世界」という二元論的世界像の再構築を含意している。たとえば依田富子は2000年に出た「A Roadmap to Millennial Japan」という非常に刺激的な論文のなかで、次のようなことを指摘している。ネオ・ナショナリストもネオ・リベラリストも「危機のなかの日本」に対して内容的にはまったく異なった批判をしながら、構造的には両者とも同じ前

提、すなわち一方に内部の国民国家としての「日本」、他方に「外部」世界としてのグローバルな資本という前提から出発している（依田は二つの「ネオ」のパラドキシカルな入れ子構造、共犯関係を言っている）。依田によれば、ネオ・リベラリストは「ナショナルな利害」という矛盾したレトリックを駆使しながら、グローバル化を賞揚し、「日本株式会社」を非難する。日本のナショナルな強化と競争力の名において、自由化と合理化の苦い丸薬を飲んで、厳しさに耐えなければならないというわけだ（cf. Yoda 2000: 637）。他方ネオ・ナショナリストのほうは保守本流を批判するが、その保守本流もアメリカの新植民地政策に屈服するだけでなく、日本では無原則な資本主義と官僚合理主義をもたらしてしまった。彼らはとくに文化民族的な整合<sup>インテグリティ</sup>保安性や、場合によっては軍事的に守らなければならない領土上の整合保安性について、ナショナリティの維新変革を要求している（Yoda 2000: 640）。しかし経済主義的なナショナリズムも文化主義的なナショナリズムも次のような事実を忘れていて、と依田は言う。

The expanse of the borderless market is, of course, not 'out there' somewhere outside Japan but is spreading within it, through the very forces that are transforming the corporate governance and the employment practices in Japanese companies or in neoliberal measures that are eroding the public sector and services in the name of reform. (Yoda 2000: 643)

ここから三番目のポイントに入ることになるが、これはこの後の議論の出発点にもなる。その議論で問題にしたいのは、失われるのはだれにとってか、ということである。どんな学問も、その対象を歴史的に考察したり、そのプロセスを研究したりするときには時間の流れを区分して、それに名称を与える。その場合われわれは現実の出来事や事件に向かうことになるが、しかしこれらはそのまま「史実」として実証に使われるのではなく、理論的方法論的に作成される。つまりわれわれ研究者には「現実」のエポックとなる切り取られた時期とその分析的な構成物との循環を避けることができないのだ。さらにわれわれ研究者自身もまた特定の不可避な時代事情に巻き込まれている。以上のことはわれわれの「盲点」となっており、そのためわれわれの歴史、とりわけ現代史の記述や表象はいやおうなく規範的な要因を持つことになってしまう。失われた10年とか20年というものは、まさにこのような状況の表現にほかならない。そしてその出来事がドラマ性を増せば増すほど、研究者たちが使うその言葉にもまた力がこもるのだろう。そこから私にとっての中心的な問いが出てくる。その問いとは、この間ヘゲモニーの問題となっている「失われた何十年ディスコース」の盲点は、それが不可避であるとするなら、いったいそれをどのように意識化できるのか、またその克服に向けて、それをどのようにして生産的なものにできるのか、という問いである。

今年2015年4月に舟橋洋一とバラック・カシュナー（Barak Kushner）によって編集された *Examining Japan's Lost Decades* という本が出版されている。この本はさまざま

な社会領域を幅広く展望したものだが、そこには危機、消失、挫折、苦悩、不確実といった言葉が頻出する。この本にはまたアンドリュー・ゴードン (Andrew Gordon) の “Making Sense of the Lost Decades: Workplaces and Schools, Men and Women, Young and Old, Rich and Poor” という論文も入っている。ゴードンはこのなかで「discourse of decline」とか「downbeat catalogue of declines」について述べているのだが、その中心となるプロットを、労働市場の根本的变化（正規雇用と非正規雇用の割合と正規雇用内部での変化）、いわゆる「格差社会」や拡大する不平等をめぐる論議とも重なる中間階級ないし中間階級意識の問題としてはっきりと提示している。

ゴードンは明らかにこのなかで、ここ数十年の間に「実質的な変化」が生じたことを認めているが、ここでもやはり「失われた (lost)」という言葉が使われている（もっとも、彼は “the changes have not been unidirectional: for some they are negative and need to be reversed, for others they are positive but insufficient” (Gordon 2015: 77) という指摘もおこなってはいるのだが)。彼はその際にこうした変化をより大きな歴史的コンテクストのなかに位置づけることに賛成しており、ここにさきほどの依田との接点が見出される。依田の出発点は、1990年代以降盛んに論議されてきた日本社会の動揺はグローバル化を強いられた資本主義の一部であり結果であるということにあった。つまり、彼女は1970年代以降すでに「西側」のいたるところにあったプロセスを出発点にしており、当然日本もこれに入ることになる。ゴードンが強調している注目すべきもうひとつの問題は “the ways in which the facts and the changes are construed are inevitably political” (Gordon 2015: 84) ということである。ゴードンは、社会の「外部」「下部」「周縁」にいる人たちの見方や行動を重要視する。彼らはまさに「失われた」という考えから身を離し、そうすることによって政自らの治的な挑戦を表現しようとする人たちである (cf. Gordon 2015: 78)。

## II

私がここ数年、厳密には3.11以来、研究のフォーカスを向けているのは、この最後に出てきた社会の「外部」「下部」「周縁」の人たちである。したがって、ここでもそのことについて述べてみたい。私はこれらの人々のなかに、さきにあげた問題に対する解答の可能性を探る一歩が見出されると考える。ただし、ことわっておかねばならないが、私自身はまだその道程のほんの入り口にしか立っておらず、ここでは現時点での私の考えの第一印象しか伝えることができない。それ以上でもなく、またそれ以下でもない。この道程の重要な出発点は、日本の1990年代に明らかになった構造変化が世界的に進行するプロセスの一部として見られるという仮説である。1970年代以来、マイクロ・エレクトロニック・デジタル技術の革命と並行して、生産志向型の産業社会から知識に基づいた情報社会およびサービス社会への転換が進んだ。この転換はもはや逆行不可能で、資本主義的な社会形態の新しい局面を迎えている。これには政治経済上の社会理

論分析が必要となるが、ここでそれについて述べる余裕はない。

この転換はまた1980年代の終わりごろから社会研究や文化研究の分野で新たな主体形成や新たな社会像についての議論を引き起こした。たとえば、「クリエイティヴ」とか「企業の自己」（これは労働力を市場化するだけでなく、その全生活を活用するものでもある）とか、あるいはまた「オタク」とか「プレカリアート」というようなテーマである。プロカリアートという発想は、2000年代の初めにイタリアのグラフィティとして「プレケア」すなわち不確か不安定と「プロレタリアート」の合成語として登場し、この間日本でも定着している。これについては他の概念同様盛んに論議がなされているが、それはとくに次のような理由からである。さきに述べた生産およびコミュニケーションのプロセスが情報化され、コンピューター化されるに伴い、諸個人に新しい要求が課せられてきたが、この要求は諸個人にとっては過剰な期待や脅威であると同時に、可能性またはチャンスでもあるという、きわめてパラドキシカルなものである。言い換えると、かつて資本主義批判として言われてきた賃労働者の自律性、創造性、自己責任、フレキシビリティ、真実性 (authenticity) といったものが、いまや「資本主義の新たな精神」の一部となり、模範となる特定の生産分野から労働世界全体のみならず、社会全体のなかに浸透し、主導権を握っているのである。

こうしたプレケアな労働生活関係の規範化というコンテクストのなかで、資本主義を批判する社会科学や政治学は「プレケア化社会」(precarization society) という考えを展開してきたが、これについては別のところで詳しく論じることにし、ここで言っておきたいのは、次のことだけである。この「プレケア化社会」という言葉で言われているのは、今日のわれわれの社会においては、あらゆる労働や生活の関係が不安定化、つまりプレケア化にさらされる傾向にあるということである (cf. Marchart 2013)。(a) それは「社会の中間層・中流」と呼ばれるものを含めて、あらゆる階層 (“chain worker” and “brain worker”, cf. Foti 2005) を貫いて、(b) 潜在的にはあらゆる人間の能力 (とりわけコミュニケーション能力) が市場化されるため、生物学的、社会的、文化的な次元にある生<sup>ライフ</sup>全体が不安定になる。(c) さらにその不安定性が主体化の戦略となるのだが、そのポテンシャルは「自己責任」の例がよく示しているように両義的である。つまり、支配的なエリート層から見れば、それは諸個人をクリエイティヴ (かつ卑屈) で、しかも統治可能でコントロール可能にするのだが、他方で諸個人は潜在的に開かれて自主決定ができる可能性としての不安定性と偶然性に対処する能力をも獲得することになり、その結果、不従順、拒否、逃走といった抵抗のための自己統治型プラクシス (practices of selfgoverning) の構築、すなわち自己権限化 (empowerment) につながる可能性もあるからである。

日本における膨大な数のプレケアな人たちの気の滅入るような実情を前にして、このような論議をすれば、幻想だとか皮肉だと言われそうだが、しかしこれは次のような二つ目の重要な前提に立ってのことである。プレケア化社会の理論家であり活動家でもあるイザベル・ロライ (Isabell Lorey) は (ジュディス・パトラーとともに)、プレケアであ

ること (precariousness) を、ただたんに対抗措置としての法律、規則、規制によって取り除かれ、絶対的な安定へと変えてしまうことのできる脅威とだけ理解してすますことはできない。それはむしろ原則的に全員に共有される不可避な生の条件<sup>ライフ</sup>なのであり、プレケアであることの中にある不平等を最小限に抑えるために、政治にとって肯定的な出発点にもなると述べている (cf. Lorey 2015)。「万人は万人に対して狼」という脅威の論理に代って、互いに連帯<sup>ケア</sup>しあう心配を結果する、このようなプレケアであることの肯定的理解とともに、ローリイはまた、さきに触れた自己統治型プラクシスという二つ目の観点、すなわち抵抗という観点にもフォーカスを向けている。彼女自身が調査した社会政治運動に関するテキストの中かに書かれていることの多くは、2000年代の初め以降、日本にも出てきた運動や出来事を想起させる。そこで、この点について、さらに述べてみよう。

### III

私が依拠するのは、スウェーデンの社会学者カール・カッセゴール (Carl Cassegård) の *Youth Movements, Trauma and Alternative Space in Contemporary Japan* というテキストと私自身による観察調査である。カッセゴールの研究調査の中心に置かれるのは、数多くの具体的活動と多岐多様なプロテスト運動で、ここに precariousness も入る。彼はこれらを 2004 年から 2012 年にかけて東京、大阪、京都で調査している。

During my stay in Kyoto 2009–2010 I visited the café or attended events arranged by the union several times a month. Not only was it a pleasant hangout. It was also a convenient hub for getting to know activism in Kansai — the area around Kyoto and Osaka. (Cassegård 2014: 2)

この当事者たちとの直接交流は同時に “produced by activists — books, articles, pamphlets, leaflets, homepages, discussion forums, newsletters and blogs” (p. 7) といった、いろいろなテキストの分析とも連動している。「youth movement」という言葉で彼が言おうとしているのは、とくにフリーター・アクティヴィズムと呼ばれるものだが、彼はこのフリーター・アクティヴィズムという言葉を広い意味で理解する。

[...] I will use the term freeter in a wide sense, to refer to young people characterised by precarity, i.e. a lack of secure employment resulting in a precarious existence. To be a freeter is not to have a particular type of employment, but to belong to a stratum of people who may drift in and out of studies, unemployment, dispatch work or other forms of irregular work or states of withdrawal. Students, young academics, artists, and young homeless people can all be part of this stra-

tum, as well as dispatch workers, part-time working housewives and social withdrawers. (p. 4)

フリーター現象は時代的に見ると、さきに述べた 1990 年代以降根本的に変化してきた日本の社会的現実には属する。総じてカッセゴールの著作は（中心人物、考え、活動形態に着目して）1980 年代以降の運動の印象的なパノラマを提供してくれるが、それには次のような意図があった。一般には、日本は 1960 年代 70 年代のラディカルな学生運動が挫折して以降、広く反政治ないし脱政治の時期に入り、それが 2000 年あるいは 2011 年の 3.11 を過ぎてはじめて克服されたと考えられている。これに対してカッセゴールは、マスメディアや学術調査によって取り上げられなかったにもかかわらず、すでに 1980 年代から社会運動のアクティビズムがあったのではないかと、いうところから出発する。プレケア化社会の理論家たちと同じように、彼もまた社会の周縁におかれた人々を視野に収めようとする。このような人々は、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とか「失われた何十年」といった主導的なディスコースの熱狂のなかで隅に押しやられ、沈黙を強いられている。カッセゴールによって可視化された人々は（cf. pp. 253-256）その歴史的社会的コンテクストからしてじつに多様なのだが、彼はそれらに「オルタナティブな空間」とか「権限」といったコンセプトと共通の動機を与えている。すなわち、挫折に汚染されない新たな実践、言語、組織の在り方を模索するという動機である。

「オルターナティブな空間」ということでは言われているのは、プレケアな人々に抑圧的な公共空間から身を引くことを可能にする場所のことで、その場所で彼らはネガティブな意味を付与されながらも、自分たちの欲求に見合った環境を創り出している。それは（セラピーの働きを備えた）退却の空間となるかもしれないし、彼らにふさわしく改造された公共性となるかもしれない（see p. 22）。決定的なのは、そうした空間が権限化の役に立つということである。言い換えると、無力感からの解放に貢献するということにほかならない。

Empowerment occurs when people regain the sense that their actions and opinions matter and that they have the power to influence things in society which they deem to be important. (p. 23)

オルタナティブな空間や権限の創出は互いに不可分に結びつきあったプロセスである。それらによってプレケアな人々は、彼らに特定の主体化の様式（すなわちアイデンティティ）をあてがおうとする主導的なディスコースを疑問に付し、さらには新たな方向に向かうことができるようになるのだ。

カッセゴールによって具体的に報告された運動からは、これがどのようにして起こったのか、またその場合どのような空間がオルターナティブとなったのかが分かるが、

同時に挫折の可能性をはらんだコンフリクトやリスクについても指摘されている。

However, the setting up of alternative spaces can create its own set of dilemmas. To promote the process of empowerment, they need to be 'safe' spaces where subalterns<sup>1</sup> and marginal discourses can be sheltered from criticism from mainstream society, but they also need to function as bases for reengaging with mainstream society, often through protest or public confrontation. Between those tasks tensions can arise. A movement that overemphasizes protest risks alienating the subalterns, while one that rests satisfied with providing a 'safe' arena will be unlikely to challenge the social order. (p. 182)

この一般的な発言のもとになっているのは彼の周到で綿密な観察である。その象徴的な事例としては、2007年に大阪の長居公園で起こった野宿者テント村での紛争という具体的な出来事が挙げられる (cf. pp. 149-165)。大阪市がテント村の撤去を決めると、活動家たちとテント村の住人たちはそれに対抗して一緒に劇の稽古をして、それを上演した。この文化活動は、公園のなかの「無人地帯」であるテント村をカウンター空間に変えた。無人地帯もカウンター空間もともにある意味ではオルタナティブな空間である。この空間のなかで活動家と住人はプレケアであることを共有していたのだが、彼らの意図や関心、それに市当局に対するスタンスはけっして同じものではなかった。運動と最終撤去が終わった後の参加当事者たちの感想はいずれもネガティブなものばかりだった。カッセゴールはこれを“Communitas of defeat” (p. 166) と呼んでいるが、それにはやはりさまざまな理由があったのだった。

次に「素人の乱」と呼ばれる運動を例にとって、もう少し詳しく論じてみたい。この運動の中心人物は松本哉で、彼はこの間国境を越えた国際的なコンテキストのなかでも活躍している。したがって、3.11の後に彼が仲間と一緒に反原発のプロテスト運動を組織した2011年のことだけではなく、それを超えて広がる彼の活動にも目を向けておきたい。この運動の根本理念は、「反消費」「共同で成り立つこと」「自律」「活動」の四つのキーワードによってまとめることができる。彼らの自己統治型のプラクティークは、一方で経済的なサバイバル (“Let us live!”) に脅かされるプレケアな状況と、他方で不確かでありながらも自己決定が可能な良き生活グッド・ライフに向けた東京高円寺商店街での共同

1 この「サバルタン」という言葉で著者カッセゴールが理解しているのは一般に次のような人たちのことである。“[...] they were usually seen as unable to participate fully in society or to make themselves heard effectively in the mainstream public sphere. Among them one finds the mentally ill as well as young people referred to through labels such as *futōkō* (school refusers), *hikikomori* (social withdrawers) or *nito* (NEET, 'Not in Employment, Education, or Training', i.e. young people not participating in the labour market or undergoing education).” (p. 181)

活動との間で、さまざまな形をとっている。この商店街で彼らは、市場への新商品の果てしなき流入をストップさせるべく、おもに「ボッタクリ経済」が無価値なゴミとして吐き出した物品の「リサイクル・修理・改造」で生活するオールターナティブな空間を創出した (see 松本 2008: 163ff.)。このアイロニカルな自己観察で彼らが明らかにしているのは、彼らもまた当然何らかのかたちで、あくなき消費の欲望に賭ける社会に寄生しているということである。このことは、ネオ・リベラルの期待を拒否することが必ずしもそれからの解放にはならないという、一般的な表現のせいで一見パラドックスに聞こえるイザベル・ローリーの発言を非常に具体的なかたちで証明している。彼らの運動はむしろ「もはやこのようなやり方ではなく、このようなもののために管理を受けるのではなく、あくまで自分で自分を統治するための対決や戦いの始まり」なのだ (cf. Lorey 2015)。抵抗の行為は卑屈な自己統治に内在しており、現在資本に奉仕しているような資格や有能から逃れる可能性は、結局のところプレケアな主体化の在り方そのものからこそ生まれてくる、というわけである。

「素人の乱」が海外でも知られるようになったのは、さきにも触れた福島「トリプル破局」後の反原発デモによってである。政治集会の形態としての「デモ」は当初から彼らのキーワードのひとつだったが、彼らはキーワードを通して自分たちをグローバルなコンテキストのなかに位置づけ、現実にもディスコースの上でも、自分たちの活動を「アラブの春」、ドイツの反原発デモ、さらには「オキュパイ・ウォールストリート」といった一連の運動の並びに数え入れた (松本/イルコモンズ)。さらに近年の松本は東アジアから南アジアに広がるネットワーク、いわゆるアーティヴィスト (artist) (「アート」と「アクティヴィスト」の合成語) の重要な結節点にもなっている。このネットワークに集まる、基本的にはプレケアな、若い芸術家たちは東京、ソウル、台北、香港、北京で、都市空間を保存する運動に参画し、そこで自分たちの自己決定による生<sup>ライフ</sup>を追求しようとするだけでなく、世界各地の考えを同じくする人たちと交流し、これらの都市 (および他の都市) に起こっているジェントリー化に抵抗している。2012年の終わりに松本は東京国立のある地下バーで「Sound across the line」という名の催し物を組織したが、そこでは香港の Hidden Agenda というグループの活動家で音楽家の Ah-Kok がこう発言している。

We are not activists who are fighting against the government, the state. We just want that they give us space, scope, where we can create our own life. Just let us be!

ここに出てくる “Just let us be!” という言葉には、すでに大きな社会変革が起きてしまったかのようにして、今現在を生きようというメッセージが込められている。

カッセゴールは彼の研究調査で、2011年の「素人の乱」は灰のなかから甦った不死鳥のようなものではなく、むしろより大きな社会政治的コンテキストのなかに置かれる

べきものだと述べている。2001年ないし2003/04年は、イラク占領に反対する反戦デモとともに長い間行われていなかった街頭でのプロテストが再燃して、ひとつのエポックとなった。街頭でのプロテストは今やニューメディアのネットワークを通して（デモではなく）ピースウォークとして組織され、そのネットワークの一グループの名称の「殺すな」も、1967年に芸術家の岡本太郎の書にちなんでいるが、これは当時のヴェトナム反戦運動のシンボルともなっていたものである（cf. Cassegård 2014: 67-68）。2003年には新しいプロテストの形態として、いわゆるサウンド・デモが登場したが、それに続いて新しく起ったプレカリアート化運動が生まれ、フリーターやプレカリアートのための運動となった。その代表的な例が2004年に東京で行われ、2008年に他の大都市でも行われることになった「自由と生存のメーデー」である。さらに反貧困ネットワークと共同してフリーター全般労働組合も結成されている。二つの組織では、従来の労組には代表してもらえない非正規雇用者や（移民を含む）プレカリアート人たちの利害関心のために運動をすることが課題となっており、両組織とも2000年代の初めにイタリアで始まったEuroMayDay運動とのつながりもはっきりと意識されている。

こうした運動を通して、このプロテストの形態は伝統的なメーデーと結びつくのだが、しかし、あえて5月1日には行わないことによって、伝統的なメーデーから一線を画している。さらにこのプロテスト運動はそのパフォーマティヴな性格においても異なっている。活気に満ちたサウンド・システム（サウンド・デモ）やピエロその他のコスプレ風の仮装も動員される。またここでは、いかなる指導者も特定の政治組織による代表への要求も拒否される。ひとりひとりの参加者は集まりやデモが始まるときにだけ一種の合意に基づいた行動や共同作業が生まれる。街頭に出るときは、貧困に反対し、サバイバルのための最低の社会保障を求めてプロテストすることが目標に掲げられるが、同時にそのアクションそのものを通して、共同で今ここでの良き生活グッド・ライフに参加する。その際に街頭が参加者たちにとって、どれほど「アンチ〔反対〕」とオールターナティヴな「プロ〔賛成〕」の空間となっているか、また他方で既成の支配的な体制を代表する警察がいたるところに動員されて、この空間を可能なかぎり制限しようとしているが、それは通行人であれ、運動に積極的に参加した人であれ、そのデモに居合せた人ならだれでも知っているだろう。

#### IV

最後にこれまで述べてきたことをまとめながら、いくつかのコメントを加えておきたい。同時にそれはシンポジウムの二つ目のテーマ「日本研究のこれから・日本研究の可能性」についてのコメントともなる。

第一に、日本およびその他の国々で起こっている根本的な変化をプレカリアート化社会への転換とみなすアプローチについてであるが、このアプローチは反ヘゲモニー、つまりプレカリアート、プレカリテート、プレカリアートであることをたんに貧困、下層、周縁、排除

の現象としてヘゲモニーの問題としてとらえてきた従来の理解の仕方に反対する立場である（それは、これまでのような理解では、いま挙げた諸問題が簡単に無視されたり、「ノーマルではない」とか「失われた」とか「挫折した」というようなかたちで扱われてしまうことになるからだ）。とはいえ、そう言ったからといって、貧困や排除についてのリサーチのような調査研究が重要ではないと言っているわけではない。それどころか、こうしたアプローチは、現象をその多様な事情と形態において調査する必要からも、依然として有効であり、とくに社会全体からすると直接重要ではないとされるようなものを含めて、具体的な個々の事例を詳しく調査研究することは大事なことになる。

第二に、こうした問題に関心のある日本研究にとって、ここから帰結することは、グローバルであると同時にローカル、つまり「グローバル」でなければならないということである。グローバルについては次の二つのファセットがある。ひとつには、「日本」を一「事例」、つまり同時代的に進行しているプレケア化過程の一屈曲変数<sup>フレクシヨン</sup>として、グローバルな視野から研究することである。このグローバルな視野はあらゆる歴史的に特殊な分枝を探ると同時に、トランス・ナショナルでトランス・カルチュラルなコンテクストにおいて探られなくてはならない。そうすると——これが二つ目のことになるが——プレケア化の現象それ自体が、日本であれ、どこであれ、トランス・ナショナルで、しかもトランス・カルチュラルなものであることが見えてくる。国境を越えて広がっている労働力の流出流入、女性の売買、人身売買、学生の交流、芸術家、歌手、研究者たちのブレン・ドレイン、あるいはそれらに類した動き、こうしたものを抜きにしてプレケアの現象を理解することはできない。東欧史家のカール・シュレーゲル(Karl Schlögel)は、このような、自由であると同時にまた強いられたヨーロッパの「ノマディズム」について書いているが、そのなかで彼は、「ブリュッセル」からのみ見られたものとはまったく違うヨーロッパ像を描き出している (cf. Schlögel 2013)。私の知るかぎり、東アジアについては、まだこのような研究は見当たらない。シュレーゲルはいま彼の「辺境ヨーロッパ」研究のためにさまざまな地域を駆けめぐっているが、それはもっともポジティブな意味でローカルと言うことができる。

最後の三番目のコメントに移ると、日本を研究する私としても、同じように日本だけでなく、東アジアをふまえて仕事をしていかななくてはならないと考えている。したがって、「素人の乱」のようなプレカリアートの運動があるところへは、どこにでも足を運ぶつもりである。この運動は明らかに、香港、ソウル、台北、北京といった東アジアのメトロポールにあるさまざまな活動にとっても一種のプロトタイプをなしている。これらのグループは、自分たちが他のグループを代表するとは考えないで——彼らは自分たちの「国」さえ代表していないわけだが——展示会やコンサートのような共同の催し物を通じて、お互いにつながりあっている。アカデミズムの研究にとって、こうした運動を安定した概念で普遍的にとらえようとするのは大変なことだろう。なぜなら、アートスペースとカリサイクルの店といった場所は、ネオ・リベラルのジェントリー化（のプロセス）によって著しく危険にさらされているからである。こうした運動は自分たちの

知恵と行動をもって不断に新しい挑戦をしていかななくてはならないが、それは、この運動に関わろうとする研究にも当てはまる。つまり、あらゆる「今、ここ」が不断に新しく見直されていかなければならないのだが、あるいはその知識もまた「プレケア」と言えるかもしれない。しかし、プレケアの場合と同じように、それを欠陥とか欠如だといって嘆く必要はない。それは、むしろ不確実や偶然性と付き合っ、新たなものに関わり、本当の意味でクリエイティブでありうるような、そういう能力の獲得を意味するのだから。プレケアなものを知ること、それは——プレケアであることと同じように——そのままレッセ・フェールを意味するわけではない。そうではなく、囲いこんだり定義をしたりしたかと思うと、またそれを超えてしまうような境界線（フーコー）<sup>パルクール</sup>を絶えず引き続けることを意味している。大学に場所を置くわれわれのような地域学科がそうしたことに対応できるのかどうか、今そのことが問われているのだ。

(小林敏明訳)

### 参考文献

- Cassegård, Carl. *Youth Movements, Trauma and Alternative Space in Contemporary Japan*. Leiden, Boston: Global Oriental, 2014.
- Foti, Alex. „MAYDAY, MAYDAY! Flex Workers, PreCogs und das europäische Prekariat“, 2005. Available at: <http://eipcp.net/transversal/0704/foti/de>. Accessed December 1, 2015.
- Karatani, Kojin. *Japan is Interesting Because Japan is Not Interesting*. Lecture delivered in March 1997; [www.karataniforum.org/jlecture.html](http://www.karataniforum.org/jlecture.html) (no more available).
- Lorey, Isabell. *State of Insecurity: Government of the Precarious*. London: Verso, 2015.
- Marchart, Oliver. *Die Prekarisierungsgesellschaft. Prekäre Proteste. Politik und Ökonomie im Zeichen der Prekarisierung* (Gesellschaft der Unterschiede 8). Bielefeld: transcript Verlag, 2013.
- Marchart, Oliver. „Auf dem Weg in die Prekarisierungsgesellschaft“. In: Oliver Marchart (ed.), *Facetten der Prekarisierungsgesellschaft. Prekäre Verhältnisse. Sozialwissenschaftliche Perspektiven auf die Prekarisierung von Arbeit und Leben* (Gesellschaft der Unterschiede 9). Bielefeld: transcript Verlag, 2013, S. 7–20.
- 松本哉「貧乏人の逆襲！ ただで生きる方法」筑摩書房、2008年。
- 松本哉、イルコモンズ／小田マサノリ「デモから振り返る2011年 日本と世界——とんでもない時代の幕開け」2012年。  
<http://www.magazine9.jp/gakko/014/report.php>. Accessed May 18, 2015.
- Schlögel, Karl. *Grenzland Europa. Unterwegs auf einem neuen Kontinent*. München: Carl Hanser Verlag, 2013.
- Yoda, Tomiko. “A Roadmap to Millennial Japan.” In Yoda, Tomiko and H. Harootunian (eds.), *Millennial Japan: Rethinking the Nation in the Age of Recession. The South Atlantic Quarterly*, Fall 2000, vol. 99/no.4, Duke University Press, pp. 629–668.